

りゅう けいじ

立花寺

－立花寺遺跡第8次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1211集



調査番号 1012
遺跡略号 RGG-8

2013

福岡市教育委員会

題字は、福岡市博多区在住の濱フミコ氏の揮毫による

序

いにしえの昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、21世紀の今日も更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、専用住宅の建設に先立って実施した立花寺遺跡第8次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、古墳時代後期の竪穴住居や総柱の掘立柱建物が検出されるなど多くの貴重な成果を挙げることができました。これは月隈丘陵西麓の立花寺一帯における当時の人々の生活を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、施主および施工業者をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会
教育長　酒井龍彦

れ い げ ん

1. 本書は、福岡市教育委員会が専用住宅の建設に先立って、平成22(2010)年6月7日～8月9日までに福岡市博多区立花寺2丁目131番1で緊急発掘調査した立花寺遺跡第8次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、竪穴住居跡をSC、掘立柱建物をSB、土壙をSK、溝状遺構をSD、ピットをSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を01から通番してNoを付した。
4. 本書に掲載した遺構の実測と製図は小林義彦が、遺物の実測と製図は小林と谷直子が斬書した。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。
6. 本書の執筆・編集は小林が行った。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1012	遺跡略号：RGG-8	分布地図番号：11-0038
調査地籍：福岡市博多区立花寺2丁目131番1		
工事面積：334m ²	調査対象面積：334m ²	調査実施面積：313m ²
調査期間：2010年6月7日～8月9日		

本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 壁穴住居	8
3. 掘立柱建物	10
4. 土 壤	13
5. 溝状遺構	16
6. その他の遺構と遺物	21
III. おわりに	22

挿図目次

F i g. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
F i g. 2	立花寺遺跡位置図 (1/4,000)	4
F i g. 3	立花寺遺跡第8次調査区周辺現況図 (1/500)	5
F i g. 4	遺構配置図 (1/150)	7
F i g. 5	22号住居実測図 (1/40)	8
F i g. 6	26号住居実測図 (1/40)	10
F i g. 7	22・26号住居出土遺物実測図 (1/3・1/4)	11
F i g. 8	28号掘立柱建物実測図 (1/80)	12
F i g. 9	29号掘立柱建物実測図 (1/80)	13
F i g. 10	28号掘立柱建物出土遺物実測図 (1/4)	13
F i g. 11	27号土壙実測図 (1/40)	14
F i g. 12	30・31号土壙実測図 (1/40)	15
F i g. 13	27・31号土壙出土遺物実測図 (1/2・1/4)	16
F i g. 14	1・23号溝実測図 (1/80)	16
F i g. 15	1号溝出土遺物実測図 1 (1/4)	18
F i g. 16	1号溝出土遺物実測図 2 (1/4)	19
F i g. 17	1号溝出土遺物実測図 3 (1/4)	20
F i g. 18	1号溝出土遺物実測図 4 (1/1・1/2)	20
F i g. 19	2号ピット実測図 (1/20)	21
F i g. 20	2号ピット・包含層出土遺物実測図 (1/1・1/4)	22

表目次

Tab.	1	立花寺遺跡発掘調査一覧表	1
------	---	--------------	---

写真目次

p h.	1	調査区全景（南西から）	6
p h.	2	22号住居（北から）	9
p h.	3	22号住居遺物出土状況（北から）	9
p h.	4	26号住居（西から）	10
p h.	5	26号住居竈周辺遺物出土状況（北から）	11
p h.	6	28・29号掘立柱建物（南東から）	12
p h.	7	27号土壙（南西から）	14
p h.	8	30・31号土壙（北西から）	15
p h.	9	1号溝（西から）	17
p h.	10	1号溝東側遺物出土状況（西から）	17
p h.	11	2号ピット遺物出土状況（北から）	21
p h.	12	出土遺物1（縮尺不同）	23
p h.	13	出土遺物2（縮尺不同）	24
p h.	14	出土遺物3（縮尺不同）	25
p h.	15	出土遺物4（縮尺不同）	26

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

福岡市博多区立花寺は、福岡平野と糟屋平野を画する月隈丘陵中央部の西麓と丘陵裾の沖積地に位置している。立花寺をはじめとする月隈丘陵一帯は、地形的に開析谷の発達が著しく、丘陵頂部が独立丘陵状をなし、それらの間は低い鞍部によって繋がるか、あるいは谷によって隔てられている。この月隈丘陵には、弥生時代から古墳時代、古代を中心とする遺跡群が随所に拡がっている。

平成22(2010)年4月22日、博多区立花寺2丁目131番1において専用住宅の建設が計画され、当該地における埋蔵文化財有無の照会が埋蔵文化財第1課に提出された。この地は、立花寺遺跡として周知化された遺跡で、これまでに7地点で発掘調査が実施され、弥生時代から古代までの集落遺構や墳墓群が検出されている。申請地は、立花寺遺跡東北縁の開析谷に面し、西に隣接する第4次調査区では古墳時代後期の総柱建物や土壙が検出されている。そのため開析谷に面して立地する申請地には、該期の遺構が拡がっていることが予想された。そこで平成22(2010)年5月7日に確認調査を実施したところ、表土層下50cmで竪穴住居や柱穴等が検出され、古代の集落域が拡がっていることが確認された。遺跡は現状での保存が望ましいが、建設計画案は、構造的に変更が不可能なものであったため、建築物で破壊される範囲を発掘調査によって記録保存することとなった。発掘調査は平成22(2010)年6月7日からはじめ、8月9日に無事終了した。この間、予想をはるかに越す遺構の多さに悩まされながらも作業に従事した方々や関係者諸氏の協力で無事終了することができた。

2. 発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課（前埋蔵文化財第2課）

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財課第1係長 常松幹雄

調査庶務 埋蔵文化財事前審査課管理係 古賀とも子

調査担当 埋蔵文化財調査課第1係 小林義彦

技能員 谷 直子

調査・整理作業 秋本君子 伊藤美伸 今村ひろ子 浦崎てい子 坂梨美紀 知花繁代

土斐崎孝子 西田文子 栄山恵子 馬場イツ子 濱フミコ 日高芳子 福田 操

増田ヒロ子 松下さゆり 松下由希子 森田祐子 諸泉良子 渡部律子 渡辺律子

なお、発掘調査や発掘調査報告書の作成にあたっては、多くの方々のご協力をいただいた。改めて深く感謝申し上げます。

次数	調査番号	所在地	調査期間	調査面積 (m ²)	報告書	時期	主な遺構	主な出土遺物
1	8807	博多区立花寺字松尾	19880430～19880615	254	272	旧石器時代、弥生時代～古墳時代	竪穴住居、甕棺墓、方形周溝遺構、掘立柱建物	ナイフ形石器、台形石器、方格規矩鏡片、縄文土器
2	9035	博多区大字金隈限の下	19900917～19901225	1,002	321	弥生時代中期～後期	竪穴住居、土壙	紡錘車
3	9357	博多区立花寺上ノ園694-3・4・5	19940124～19940326	241	465	縄文時代中期～古墳時代後期	竪穴住居、土坑、土壙墓、木棺墓、甕棺墓	縄文土器、弥生土器、石器、新羅土器
4	9439	博多区立花寺539-3外	19940905～19941027	590	466	古墳時代後期	掘立柱建物、土壙	
5	0050	博多区立花寺2丁目地内	20001115～20010113	416	779	古墳時代～中世	竪穴住居、掘立柱建物、土壙、溝	
6	0106	博多区立花寺2丁目地内	20010517～20011020	840	779	弥生時代～奈良時代	竪穴住居、掘立柱建物	滑石製臼玉、未成品
7	0406	博多区立花寺2丁目12-6	20040405～20040416	71	年報VOL.19	弥生時代～古墳時代	竪穴住居、掘立柱建物、土壙、溝	石劍、石戈、石包丁、石匙
8	1012	博多区立花寺2丁目131番1	20100607～20100809	313	本報告書	弥生時代～古墳時代	竪穴住居、掘立柱建物、土壙、溝	須恵器、土師器、石器

tab. 1 立花寺遺跡発掘調査一覧表

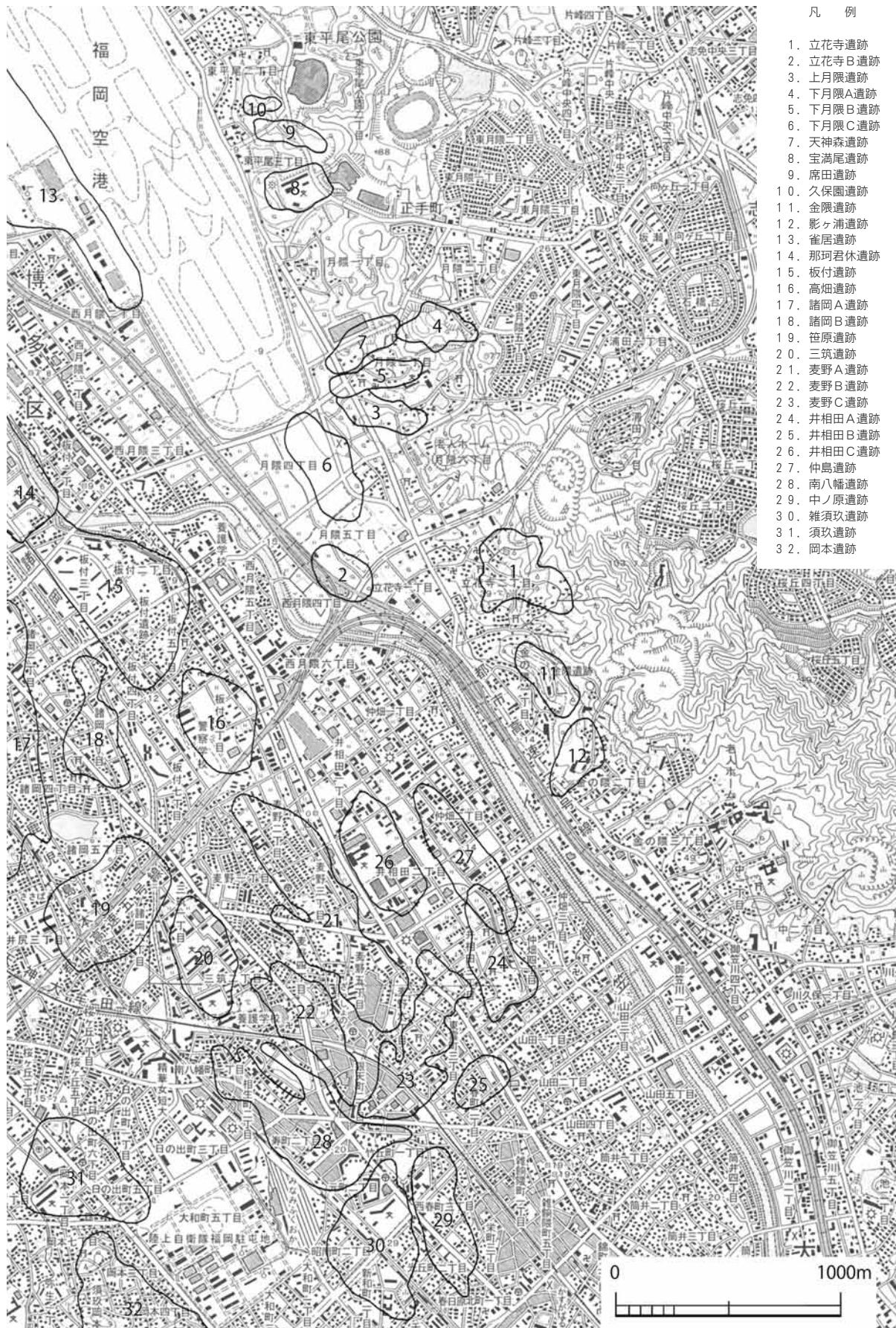


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

3. 立地と歴史的環境 (Fig. 1~3)

立花寺遺跡は、福岡平野の東部、福岡市博多区立花寺から金隈の丘陵斜面に占地する弥生時代から古代を中心とする遺跡で、その拡がりは南北長が400m、東西長300mほどである。立地的には、福岡平野の東縁にあって糟屋平野との境を画す月隈丘陵の西側斜面上に位置する。この月隈丘陵は、三郡山地から派生して四王寺山、金隈を経て月隈へと連なる小山塊で、その基盤層は第三紀層の堆積岩からなり、眼下には四王寺山系や牛頸丘陵に源流を発する御笠川が博多湾にむかって北流している。この月隈丘陵の西斜面は、開析による谷が発達し、丘陵は独立丘陵状をなしている。一方、眼下には博多湾にむかって御笠川が北流し、その右岸と月隈丘陵との間には狭小な沖積扇状平野を形成しており、これらの丘陵や沖積地には、弥生時代から古墳時代や古代の集落域や墳墓域が数知れず拡がっている。

この御笠川中流域の右岸に拡がる遺跡群を概観すると、その立地的条件から丘陵上に占地するものと沖積地上に占地するものの二つに大別される。まず、丘陵上における遺跡の出現は、弥生時代の前期に始まる。影ヶ浦古墳群や持田ヶ浦古墳群、上月隈B遺跡、宝満尾遺跡で前期～中期初めの貯蔵穴群が出現するが、この期の住居群は未確認である。中期になると集落域は、月隈遺跡、席田遺跡、中尾遺跡、赤穂ヶ浦遺跡、久保園遺跡など広範囲にわたって展開する。なかでも久保園遺跡では、5間×8間の大型建物が検出されている。また、赤穂ヶ浦遺跡では、鹿が描かれた横帯文銅鐸の鋳型が、席田大谷遺跡でも石製の銅戈鋳型模造品が出土しており、青銅器の铸造を窺がわせる遺物も出土している。墳墓遺跡では、席田青木遺跡、宝満尾遺跡、下月隈天神森遺跡、上月隈遺跡、金隈遺跡などがあり、土壙墓群や甕棺墓群が拡がっている。このうち上月隈遺跡3次調査では、中期後半の7号甕棺墓に中細型銅劍とガラス玉が副葬されていた。宝満尾遺跡の後期の土壙墓群にも前漢鏡や素環頭刀子、ガラス管玉が副葬されている。次の古墳時代になると、丘陵の各所に群集墳が造営される。宝満尾古墳、席田大谷古墳群、丸尾古墳群、天神森古墳群は、5～6世紀の古墳群で月隈丘陵の北側に造営されるが、数基で構成される小群で、規模的には最小の単位である。立花寺遺跡東側の後背丘陵上には立花寺古墳群や笹ヶ浦古墳群、文殊谷古墳群、金剛山古墳群、七曲古墳群があるが、いずれも2～6基からなる小群で拡がっている。これに対して、丘陵の南側に分布する堤ヶ浦古墳群や持田ヶ浦古墳群、影ヶ浦古墳群は数十基からなる大規模な古墳群で、丘陵の北と南では好対照をなす。

一方、沖積地の微高地上には雀居遺跡や下月隈C遺跡、立花寺B遺跡などが拡がっている。これらの遺跡では、縄文時代晚期の突帯文期に集落域が営まれ始め、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて大規模な集落が展開し、雀居遺跡では大型建物が検出されている。また、その生産基盤となる水田跡も弥生時代後期から古墳時代、古代、中世まで連綿と営まれている。なかでも立花寺B遺跡では、初期の輸入陶磁器類が、下月隈C遺跡では、「皇后宮職」と記された木簡や人形、斎串、墨書き土器が8世紀後半の流路から出土している。

このような中、立花寺遺跡での初現は、旧石器時代の台形石器やナイフ形石器が出土した第1次調査区に始まる。次の縄文時代には第3次調査区で中期の縄文土器が出土しているが、旧石器～縄文時代はきわめて稀薄で散漫な拡がりでしかない。弥生時代になると、第1・2・6・7次調査区などで竪穴住居や甕棺墓、木棺墓などが検出されており、集落域や墓域が域内に広く分布する傾向が窺がえる。特に第1次調査区では、方格規矩鏡片が出土している。さらに古墳時代には第1・3・5・7次調査区で竪穴住居や掘立柱建物、土壙などが検出されている。飛鳥時代～古代には、第2・6次調査区で大型建物を伴う掘立柱建物群や柵状遺構、井戸などがあり、新羅系土器や初期輸入陶磁器、硯、瓦片などが出土している。



Fig. 2 立花寺遺跡位置図 (1/4,000)

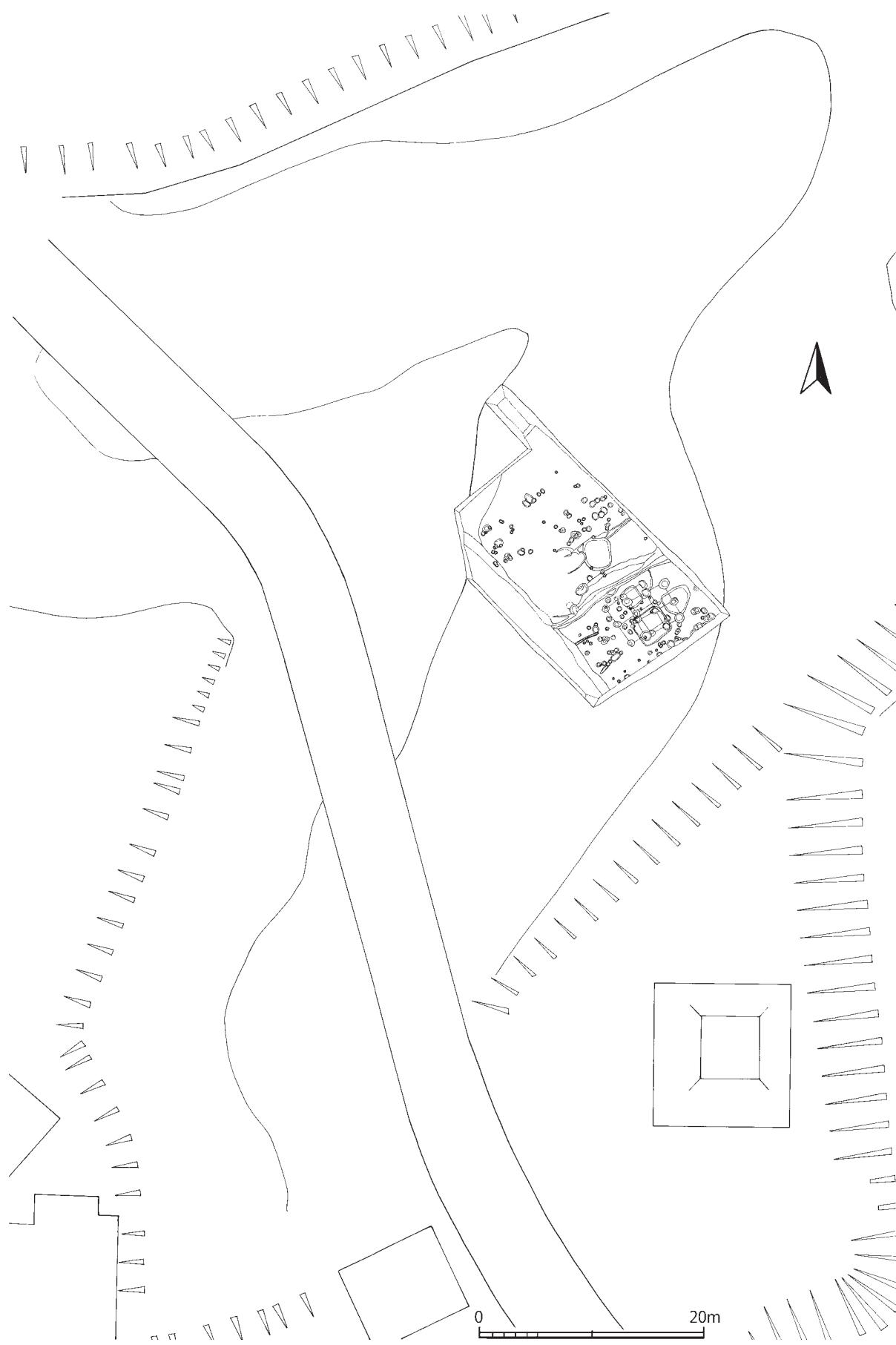


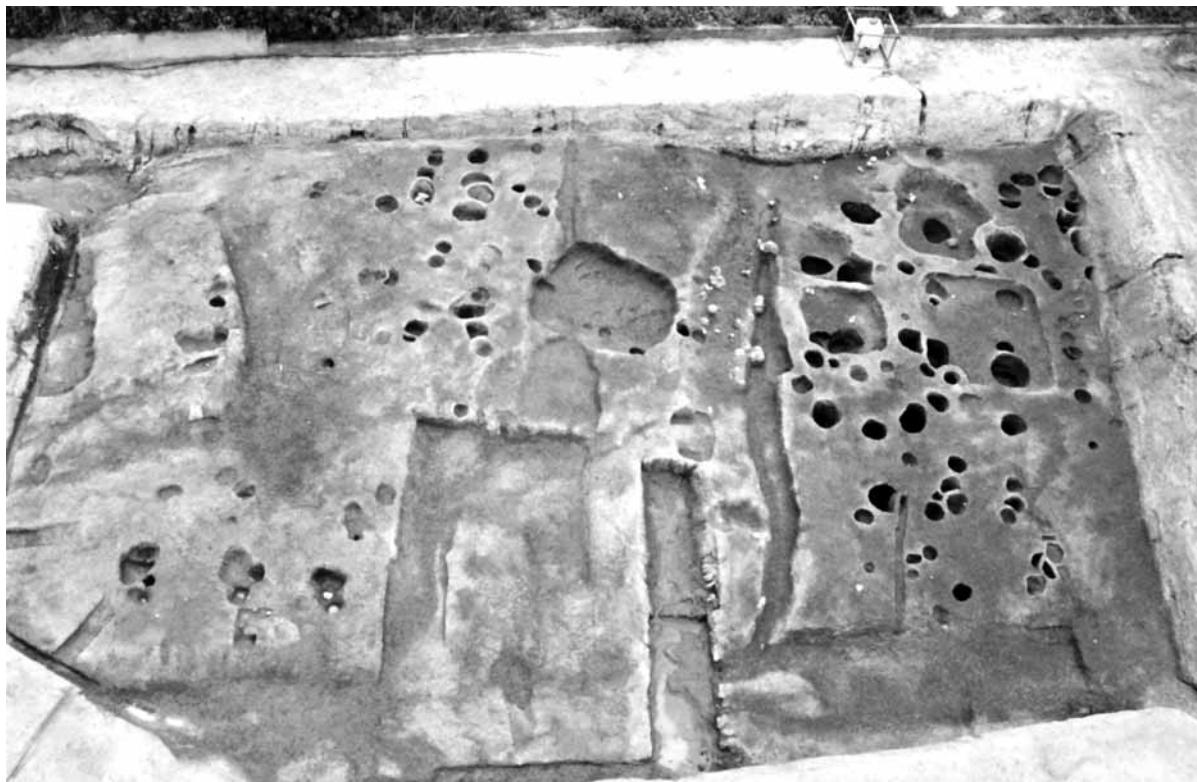
Fig. 3 立花寺遺跡第8次調査区周辺現況図 (1/500)

II. 調査の記録

1 調査の概要 (Fig. 4~6 ph. 1)

立花寺遺跡第8次調査区は、立花寺遺跡の北東縁に位置し、申請地は、東から西へ開いた緩傾斜地で、北端には開析谷に沿って西の沖積地にむかって細い谷水が流れている。北と南にはこの開析谷を囲むように丘陵が舌状に張り出している。現況は畠地で、東の谷奥は雑木と篠竹が繁茂する雑木林である。調査対象面積は334m²で、調査面積は313m²である。

発掘調査は、パワーショベルによる表土層の除去作業から始めた。表土層を50~60cm掘下げた地点で基盤層の褐色土を検出した。遺構は、調査区の中央部で谷に沿うように西流する溝を検出した。この溝を境にして北は沢にむかって緩やかに傾斜し、南側は舌状にのびた丘陵にむかって緩やかに高度を上げていくが、土層的には須恵器片が混入する軟質の黄褐色土で、明確な遺構は検出されず基盤層としての確証を得なかった。そのためこの黄褐色土層が、基盤層であるか否かを明確にするため調査区東壁に沿ってトレンチを設定してその確認を図った。結果的に、この遺物混入層は丘陵の流出土の堆積層で、その20cmほど下層で遺構面を検出し、この遺構面が舌状にのびた丘陵を削り出した造成面であることが明らかになった。検出した遺構は、西流する溝を挟んで北側では、小型の竪穴住居1棟と柱穴を、南側では造成面上で竪穴住居1棟と総柱建物2棟のほかに土壙を検出した。分布的には、溝より北側が散漫で、南側が密な好対照な在り方を示している。面的に北側には有効な面的拡がりの確保が難しいことに起因するものと推測される。また、西側は隣接する第4次調査区のⅢ区との間に100cmほどの比高差があり、開口する谷口にむかって雛段状に造成されている。なお、調査区は、谷と直交する南北軸に沿って2m×2mの方眼を任意に設定し、北から南へはアラビア数字で、東から西へはアルファベットを組み合わせてg-12区と云うように表記した。この南北軸は、磁北より27°40'西偏している。



ph. 1 調査区全景（南西から）



Fig. 4 遺構配置図 (1/150)

2 竪穴住居 (SC)

竪穴住居は、2棟検出した。立地的には、開析谷の南側に張出した舌状丘陵の北斜面を雛段状に削り出して狭地を造成し、その中央を南流する溝を挟んで対峙している。規模的には2棟とも小規模であるが、26号住居には竈の痕跡があり、土壙と比べても規格的であることから住居とした。

22号住居 SC-22 (Fig. 5・7 ph. 2・3・15)

22号住居は、調査区中央部の東寄りに位置する小型の住居で、北壁は23号溝を切り、南には1号溝が隣接している。平面形は、南北長が290cm、東西長が240cmの隅丸方形プランを呈する。壁面は、やや緩やかに立ち上がり、壁高は25~25cmを測る。床面は、平坦で北壁側にむかって緩やかに傾斜している。床面上には、20~30cm径の円形ピットが4基あるが、いずれも7~10cmと浅く主柱穴は特定できない。床面上には焼土粒と炭粒が薄く散乱していることから、竪穴住居と判断した。床面積は、 6.96m^2 。遺物は、須恵器壺・甕片や土師器甕・瓶片のほかに黒曜石片が出土した。

1は、須恵器壺である。胴部は、やや肩の張った球形をなす。調整は、内底面がナデ、胴部はヨコナデ。外面は、頸部がヨコナデ、胴部上半がカキメ、下半はナデ、外底面はヘラケズリ。胎土には小~中砂粒を含み、焼成は良好。灰色。

26号住居跡 SC-26 (Fig. 6・7 ph. 4・5・15)

26号住居は、調査区の南端に位置する小型の住居で、28・29号掘立柱建物と重複し、その中でもっとも新しい。平面形は、南北長が270cm、東西長が295cmの方形プランを呈する。壁面は、やや急峻に立ち上がるが、壁高は南壁が15cm、北壁が7cmと削平が著しい。床面は平坦で、南壁から北壁にむかって緩やかに傾斜している。貼床は検出できなかった。南壁に中央部よりやや西寄りに竈が付設されている。竈は、壁面を15cmほど壁外に張出し、その内側に40cm×70cm径の楕円形をした浅い窪みがあり、その中に焼土粒と炭粒が薄く堆積していた。火床と考えられる。床面積は 7.96m^2 で、主柱穴は検出できなかった。遺物は、竈の灰層から土師器甕片がまとまって出土したほかに須恵器壺・甕・坏片と黒曜石片が出土した。

2は、砂岩質の砥石である。底面は表裏2面で、表面には幅が6~9mmの浅い凹線がある。

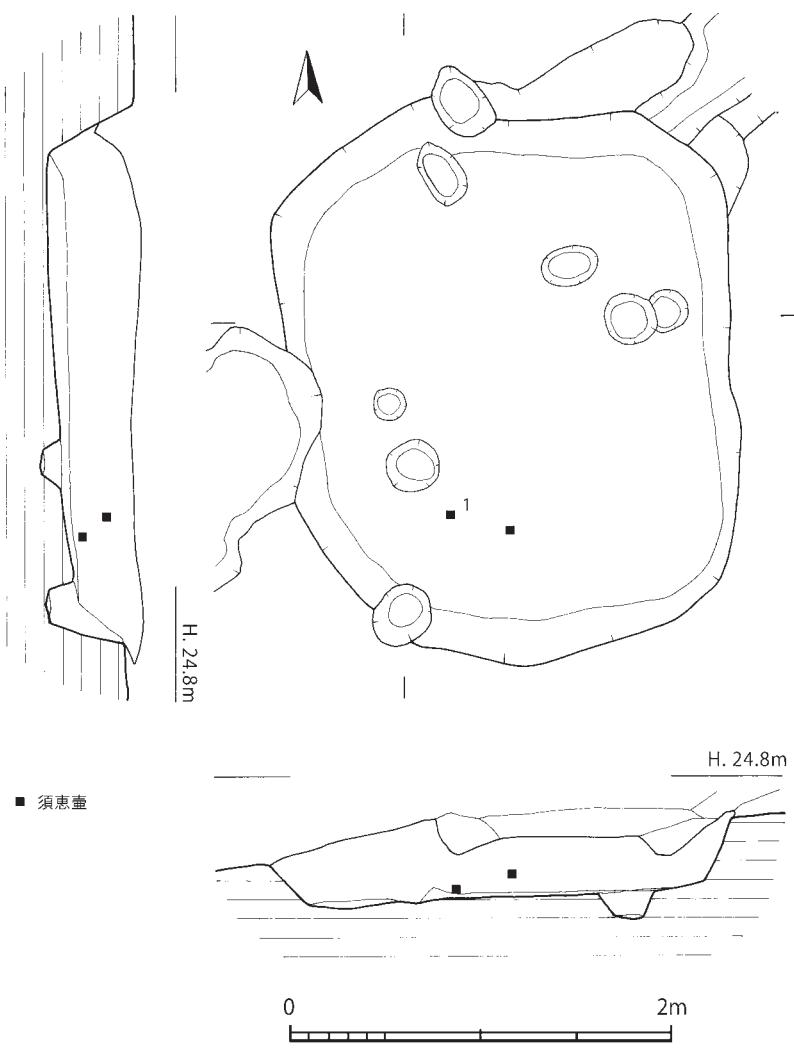
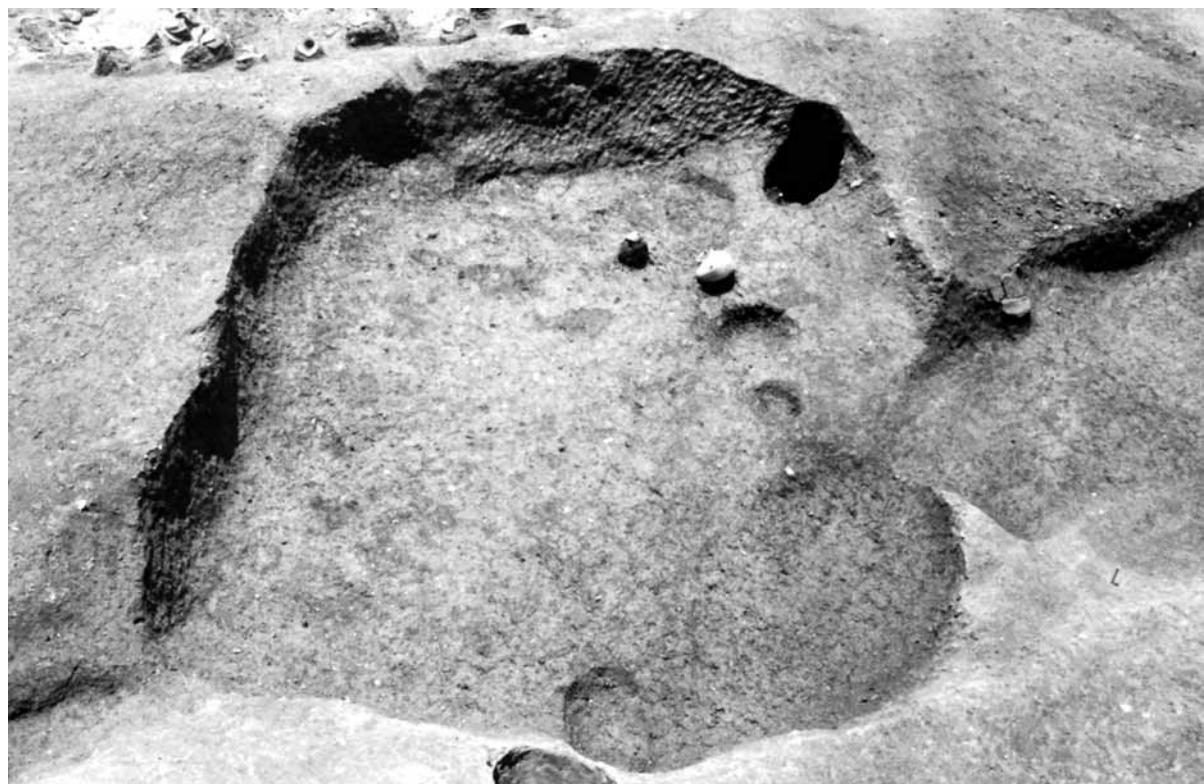


Fig. 5 22号住居実測図 (1/40)



p h. 2 22号住居(北から)



p h. 3 22号住居遺物出土状況(北から)

3 掘立柱建物

(S B)

掘立柱建物は、2棟の総柱建物を検出した。分布的には、雛段上に造成された1号溝の南側に占地している。調査区西側の造成段下にも総柱建物が検出されている。柱穴は、円形～方形プランのしっかりしたもので穴底に礫石を敷いて礎石としたものもある。

28号掘立柱建物SB-28 (Fig. 8 ph. 6)

28号掘立柱建物は、調査区の南端に位置する。建物は、26号住居や29号掘立柱建物、27号土壙、30号土壙、31号土壙と重複し、この中で26号住居よりも古く、29号建物や27・30・31号土壙よりも新しい。建物は、2間×2間の

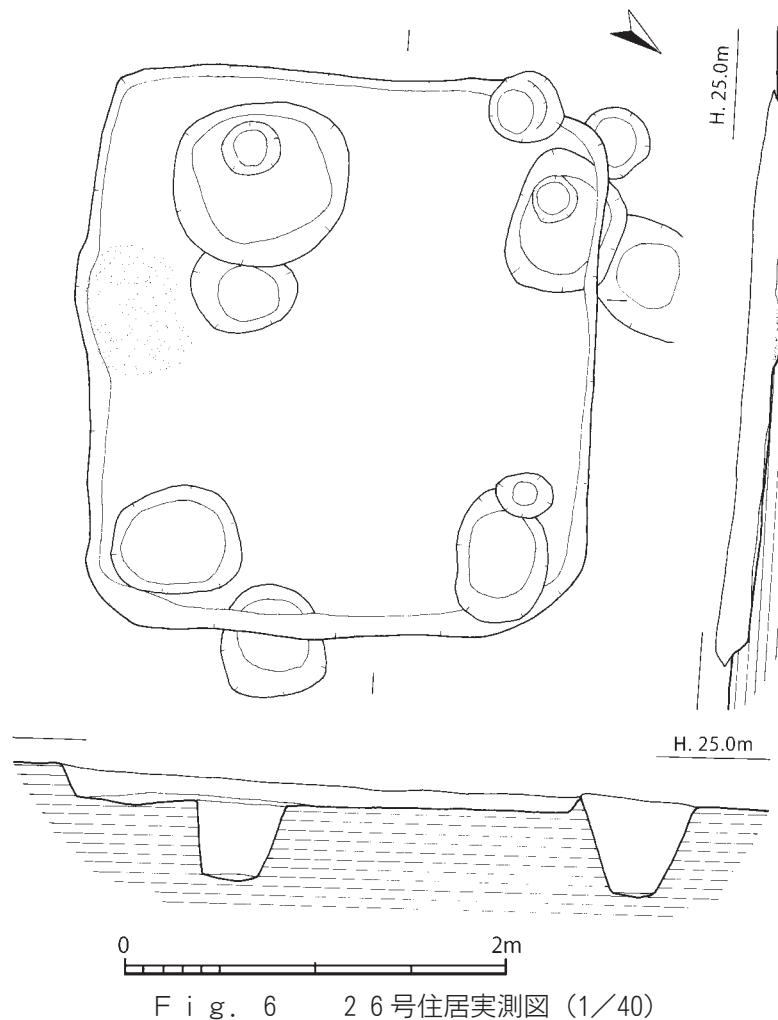
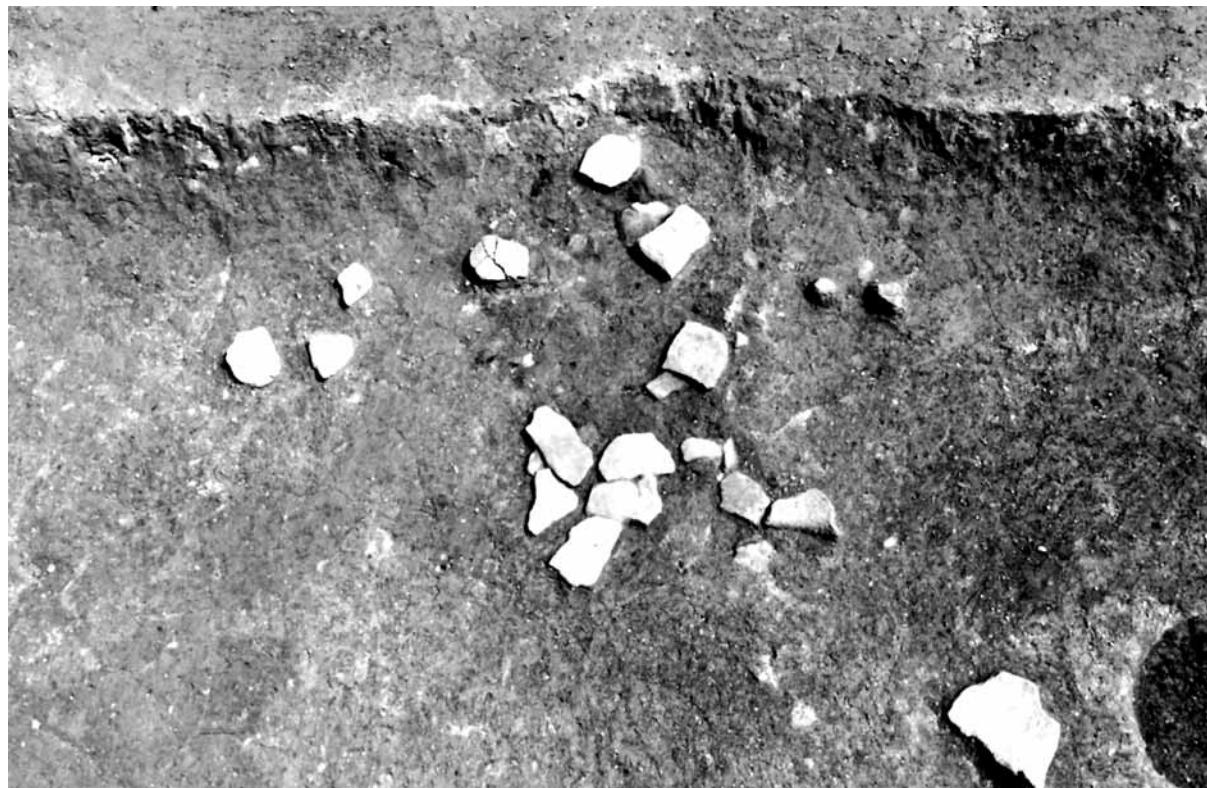


Fig. 6 26号住居実測図 (1/40)



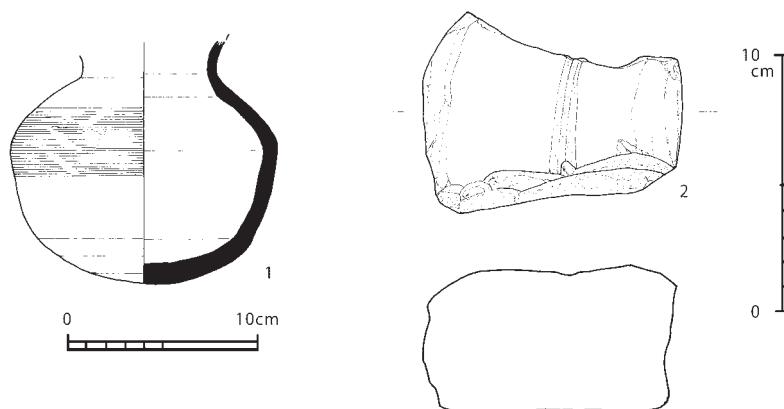
ph. 4 26号住居 (西から)



p h. 5 2 6号住居竈周辺遺物出土状況（北から）

総柱建物で、桁行全長は370cm、柱間は170cm・200cm。梁行全長は340cm、柱間は160cm・180cmである。主軸方位をN-66.5°-Eにとる。柱穴は、直径が50cm×70cmの楕円形や直径が90~95cmの円形プランを呈し、深さは55~80cmと深くしっかりしているが、中央の筋柱はやや浅い傾向がある。

柱穴のうちP1とP2は、壙底に



F i g. 7 2 2 • 2 6号住居出土遺物実測図 (1/3・1/4)

握り拳大の円礫を敷いて根石としている。また、P5とP6では、直径が約20cmの柱痕跡が検出された。暗茶褐色土の覆土中からは土師器甕のほかに須恵器壺・甕・壺・壺蓋等が出土した。床面積は、12.6m²。

3・4は、P3出土の須恵器壺である。口縁部は、水平に摘み出した蓋受け部から短く内傾する。調整は、口縁部～体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラケズリ。3は、口径が10.8cm、器高は3.8cm。外底面には一筋のヘラ記号を刻んでいる。胎土は精良で、小砂粒を含み、灰色。4は、口径が10.6cm、器高は3.5cm。胎土はやや粗く、小～粗砂粒を含み、色調は灰色。

29号掘立柱建物 SB-29 (Fig. 9 p h. 6)

29号掘立柱建物は、調査区の南端にあって、26号住居や28号掘立柱建物、30・31号土壙と重複し、この中で30・31号土壙より新しく、28号建物や26号住居よりも古い。建物は、2間×2間の総柱建物で、桁行全長は400cm、柱間は200cmの等間。梁行全長は380cmで、柱間は180cm・200cmであるが、中央の桁柱筋は東西にやや傾いでいる。主軸方位をN-27°-Wで、床面積は15.2m²。

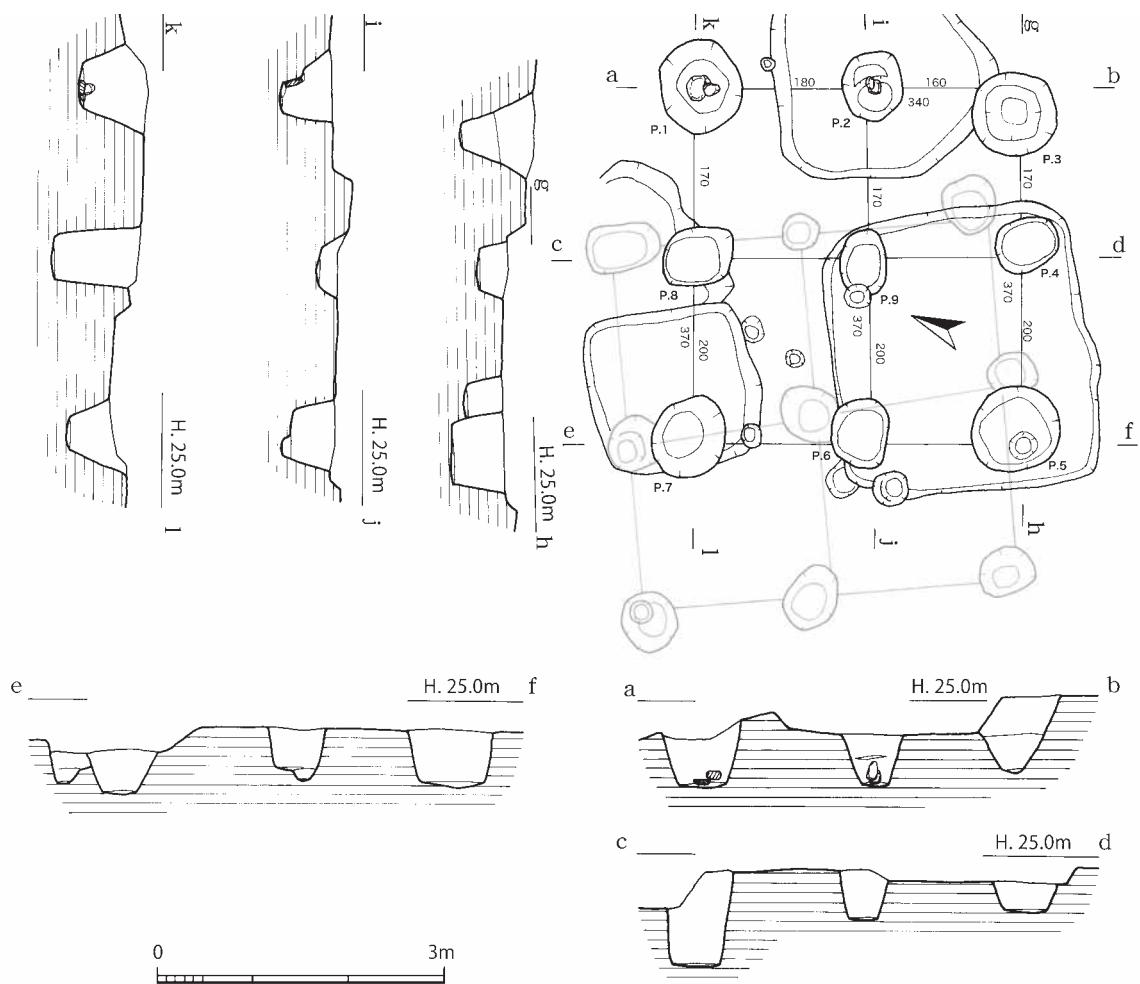
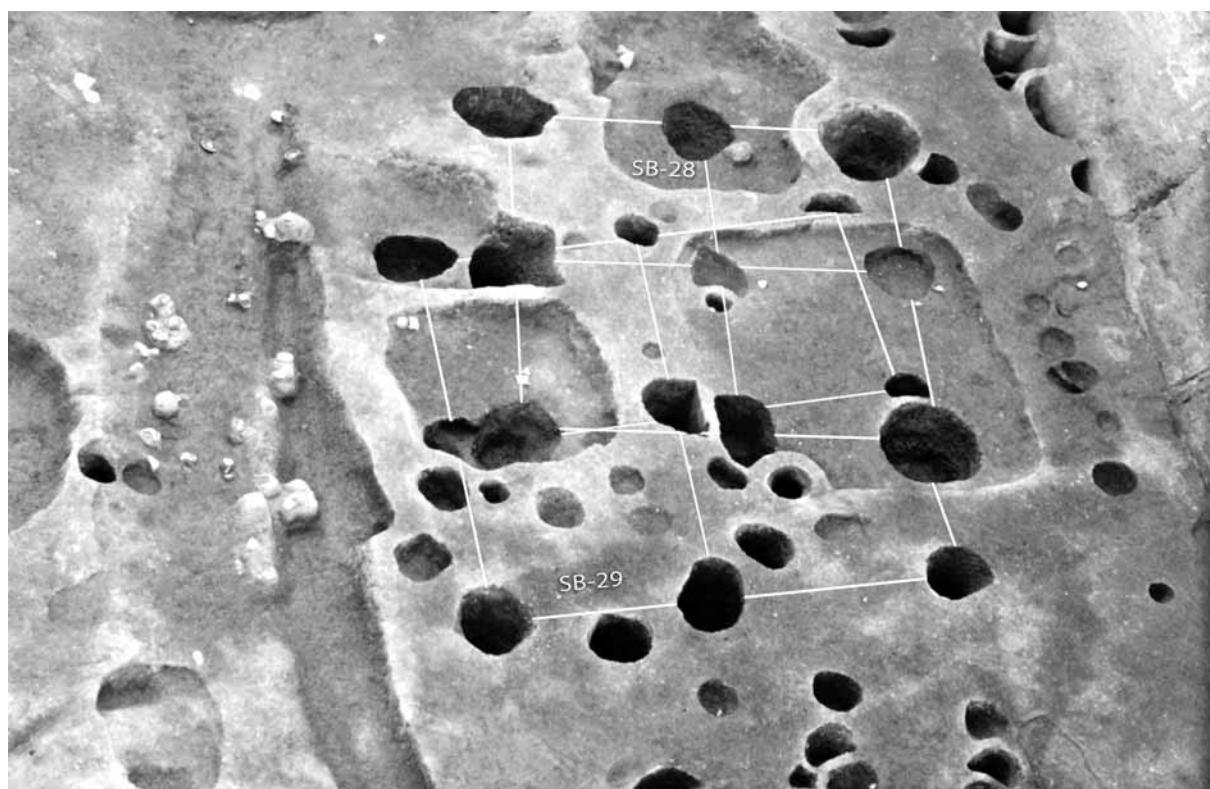


Fig. 8 28号掘立柱建物実測図 (1/80)



p h. 6 28・29号掘立柱建物 (南東から)

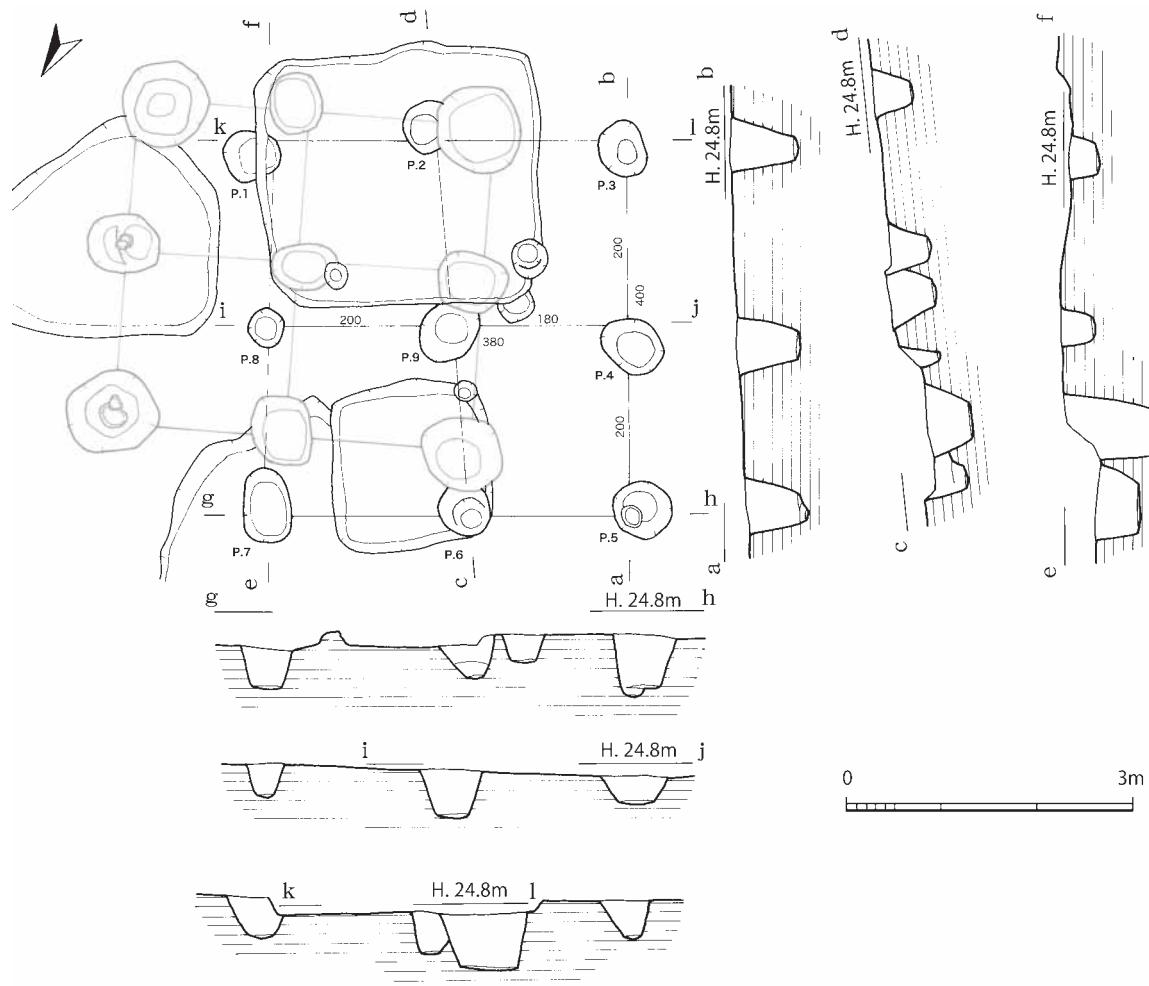


Fig. 9 29号掘立柱建物実測図 (1/80)

柱穴は、50～70cmの楕円形～円形プランを呈し、深さは45～75cmを測る。P5からは直径が20cmほどの柱痕跡が検出された。遺物は、土師器甕や須恵器壺・甕片と黒曜石が出土した。

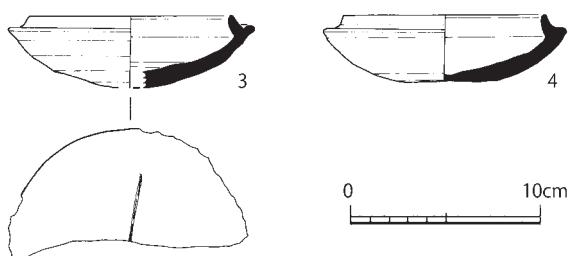
4 土 壤 (SK)

土壙は、すべてで3基検出した。プラン的には方～不整方形をなし、いずれも掘立柱建物の柱穴に先行して開削されているが、その機能は明らかではない。また、分布には調査区の南東部にまとまる傾向があり、竪穴住居との関わりが想起される。

27号土壙 SK-27 (Fig. 11 p.h. 7)

27号土壙は、調査区北東端に位置し、壙央は28号掘立柱建物に切られている。平面形は、東西長が270cmであるが、南北長は東壁が100cm、西壁が20cmの三角形状をした不整な楕円形プランをなす。壁面は、やや緩やかに立ち上がり、壁高は西壁が20cm、東壁が35cmである。覆土は、真砂土砂粒を含んだ暗褐色土で、須恵器甕・台付壺・高壙・壙・壙蓋と土師器甕片が出土した。

5・6は、須恵器壙蓋。5は、口径が12.3cm、器高は3.7cm。口縁部は、垂直に立ち上がり、内唇はシャープに内傾する。体部～口縁部はヨコナデ、内天井面はナデ、外天井面はヘラ

Fig. 10 28号掘立柱建物
出土遺物実測図 (1/4)

ケズリ後にナデ調整。胎土は精緻で、僅少の小砂粒を含む。6は、口径が13.6cm、器高は4cm。口縁部は垂直に立ち上がる。口縁部～体部がヨコナデ、内天井面はナデ、外天井面はヘラケズリで、一筋のヘラ記号が刻まれている。胎土には小～粗砂粒を含み。7は、口径が11.6cm、器高が4cmの須恵器坏。口縁部は、やや上方に摘み出した蓋受け部から反りぎみに内傾する。胎土は精緻で、口縁部～体部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラケズリ後にナデ。胎土は精緻。灰褐色。8は、口径が11.8cmの須恵器脚付碗。胴部は、内巻ぎみに立ち上がり、口縁部は、小さく内傾する。胴部中位には2条のシャープな凹線が巡っている。口縁部～胴部は、ヨコナデ、胴部下半はヘラケズリ後にナデ調整。胎土はやや粗く、小～粗砂粒を含む。9・10は、小型の土錘で、緻密な胎土には微細砂を含む。9は、長さが3.35cm、孔径が0.3cm、重さは2g。赤褐色粒をわずかに含む。10は、長さが4.17cm、孔径が0.2～0.3cm、重さは2.9g。

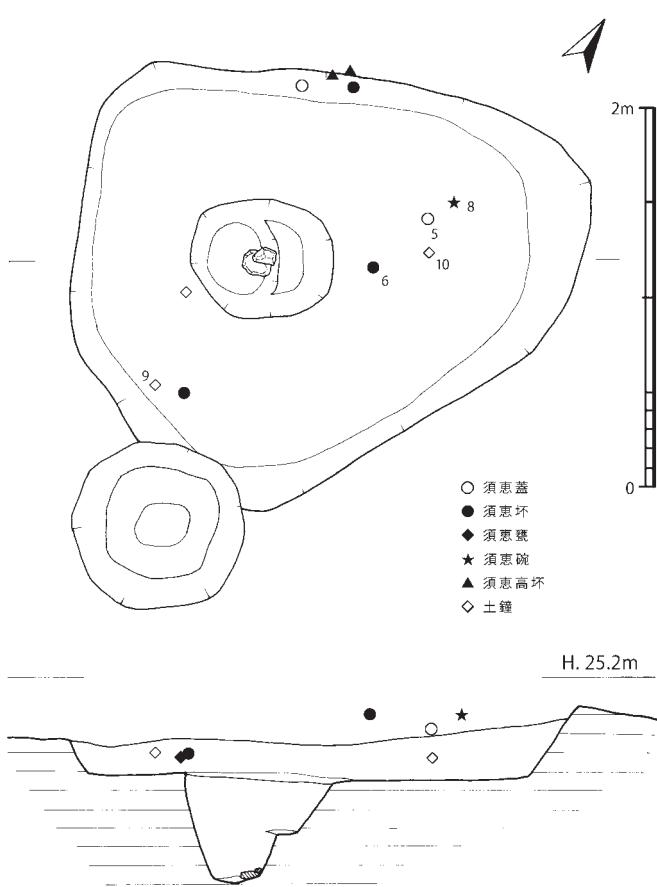


Fig. 11 27号土壤実測図 (1/40)



p h. 7 27号土壤 (南西から)

30号土壙 SK-30 (Fig. 12 p h. 8)

30号土壙は、調査区の東南部にあり、すぐ北には1号溝が西流している。土壙は、28・29号掘立柱建物や31号土壙と重複し、31号土壙より新しく28・29号建物よりも古い。平面形は、東西長が168cm、南北長が178cmの方形プランを呈し、深さが30cmの壁面は、緩やかに立ち上がる。床面は平坦であるが、中央部がわずかに凹レンズ状に窪む。暗黒茶褐色土の覆土からは、須恵器壺や土師器甕片が出土した。

31号土壙 SK-31 (Fig. 12 p h. 8)

31号土壙は、調査区の南東部に重複する26号住居や28・29号掘立柱建物の中でもっとも北東部にあり、西壁は30号土壙に、また北壁は1号溝によって削平されている。平面形は、北壁と西壁が消失しているために判然としないが、直径が250cmほどの円形プランをなそうか。壁面は、急峻に立ち上がり、壁高は35cm。床面は平坦である。覆土は、30号土壙と大差ない暗黒茶褐色土であるが、粗砂粒や粘土粒をわずかに含む。遺物は、須恵器壺と土師器甕片がわずかに出土した。

11は、小型の土師器甕で、口径が11cm、器

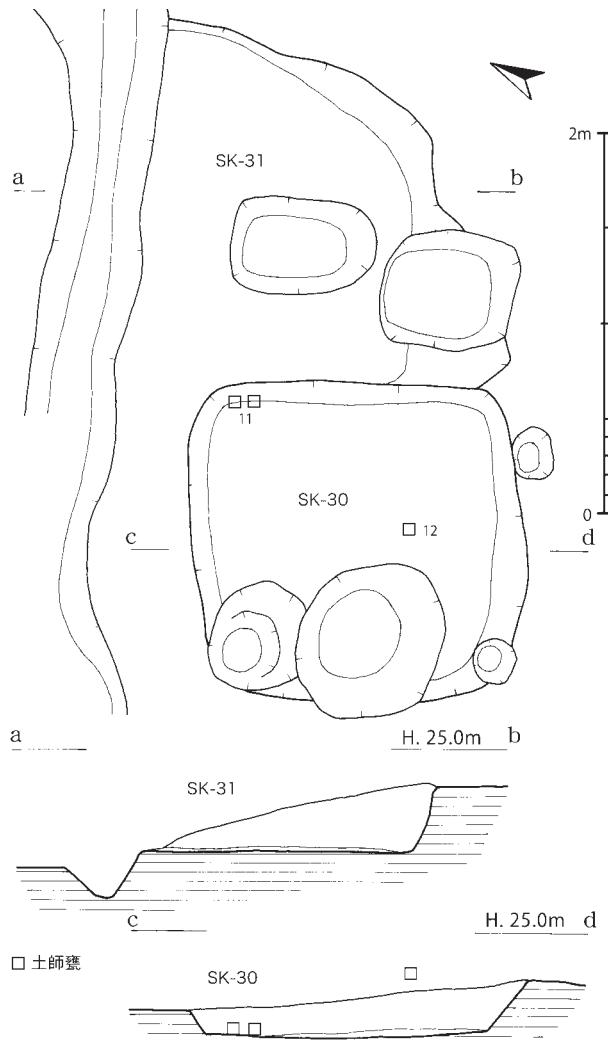


Fig. 12 30・31号土壙実測図 (1/40)



p h. 8 30・31号土壙(北西から)

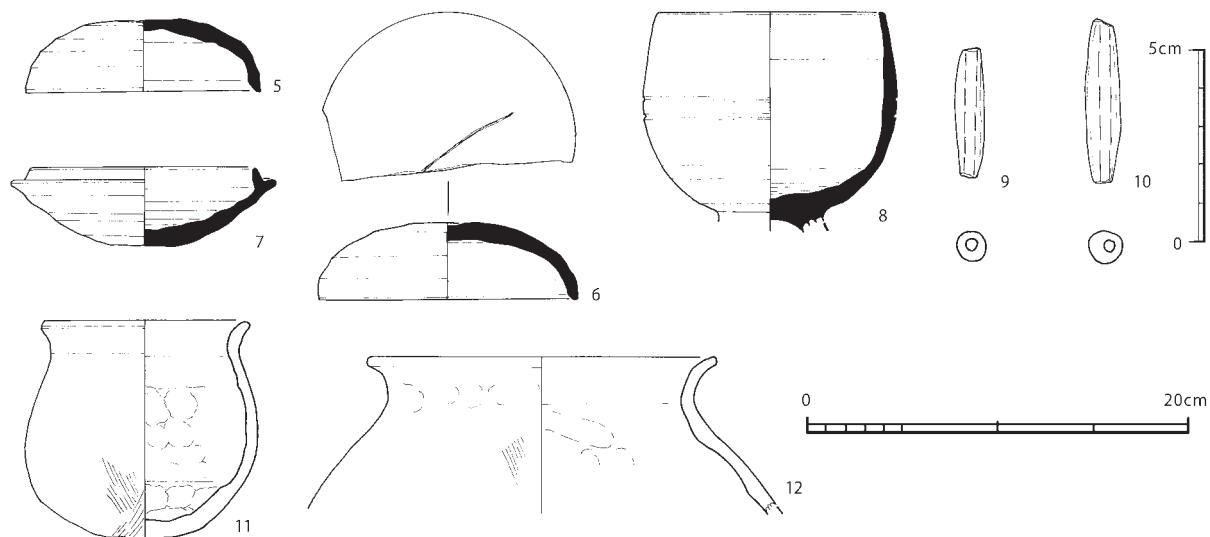


Fig. 13 27・31号土壤出土遺物実測図 (1/2・1/4)

高は 11.5cm である。口縁部は、直口した後に短く外反し、球形の胴部は下膨れぎみになる。胴部外面は粗いハケ目、内面は指頭押圧ナデ調整。外面は被熱により赤変し、内面には炭化物様の黒色物が付着している。胎土は粗く、外面は赤橙～灰黄褐色、内面は明赤橙色。12は、口径が 18.4cm の土師器甕である。口縁部は、短く直口した頸部から小さく外反し、胴部は卵形をなそう。胎土は良質で、小～粗砂粒を含み、焼成は良好。

5 溝状遺構 (SD)

溝状遺構は、調査区の中央部で西流する 2 条を検出した。このうち 1 号溝は、須恵器が多量に出土しており、規模的にも幅広で特筆している。このほか南側の掘立柱建物群の西で細くて短い溝状

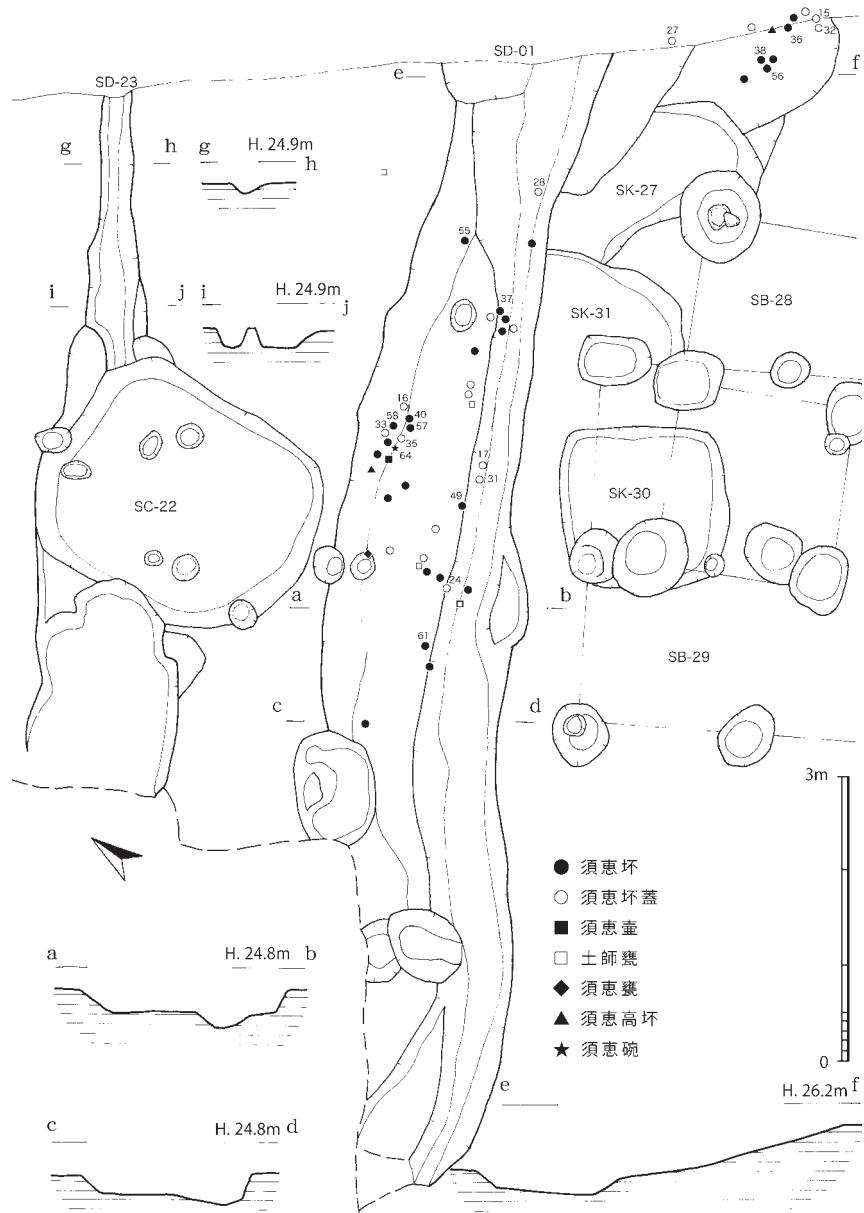


Fig. 14 1・23号溝実測図 (1/80)



p h. 9 1号溝(西から)



p h. 10 1号溝東側遺物出土状況(西から)

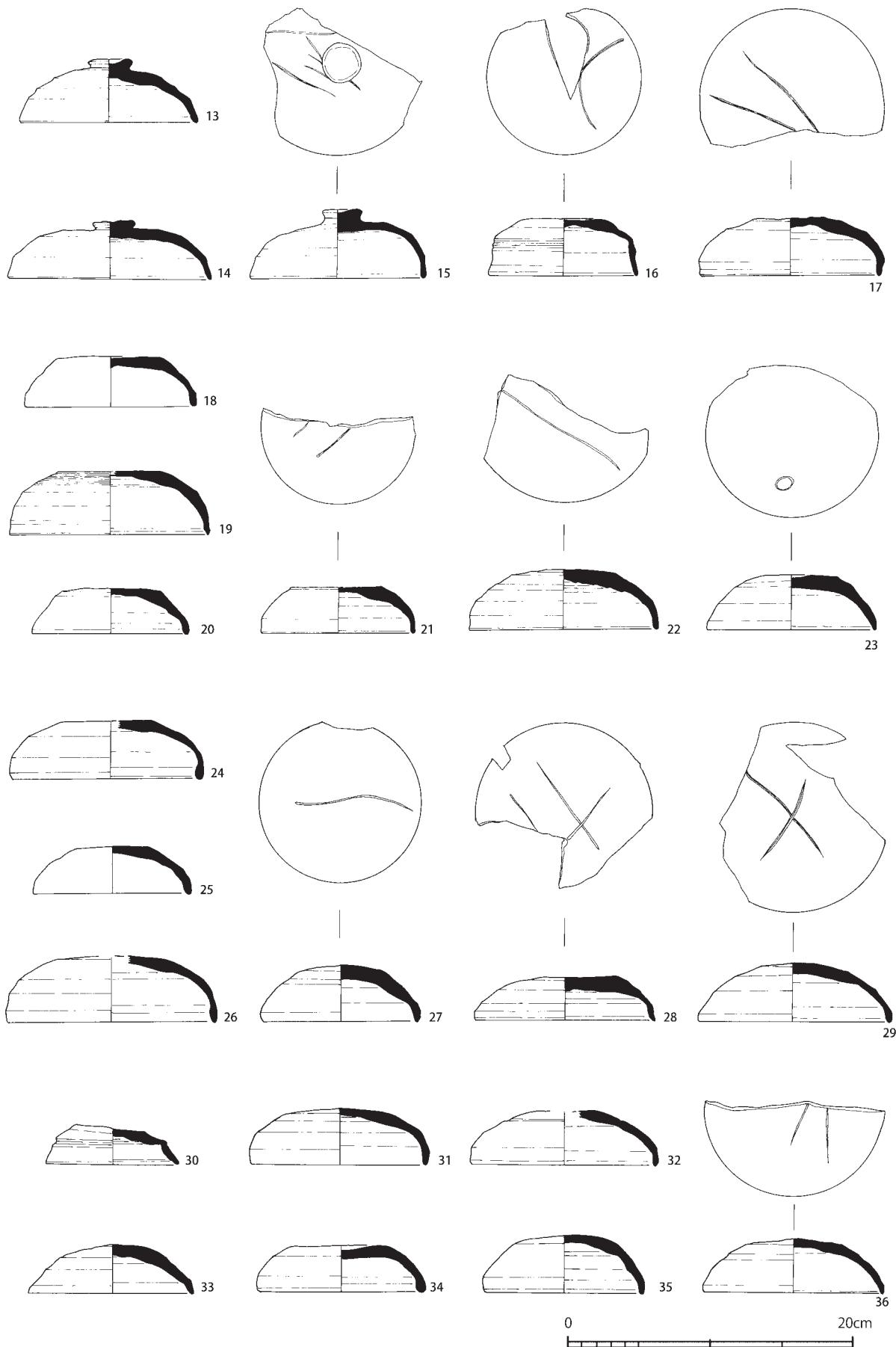


Fig. 15 1号溝出土遺物実測図 1 (1/4)

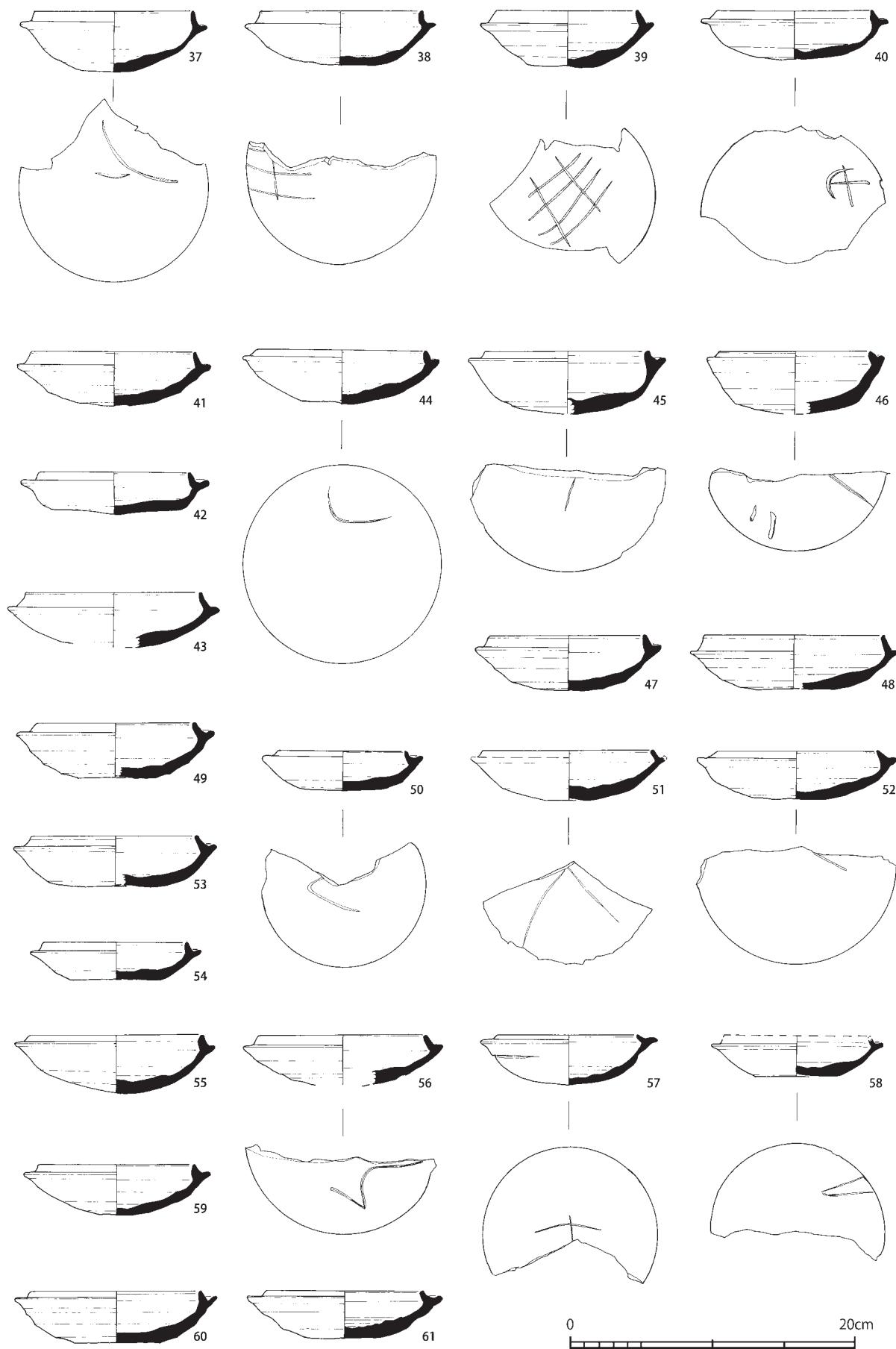


Fig. 16 1号溝出土遺物実測図 2 (1/4)

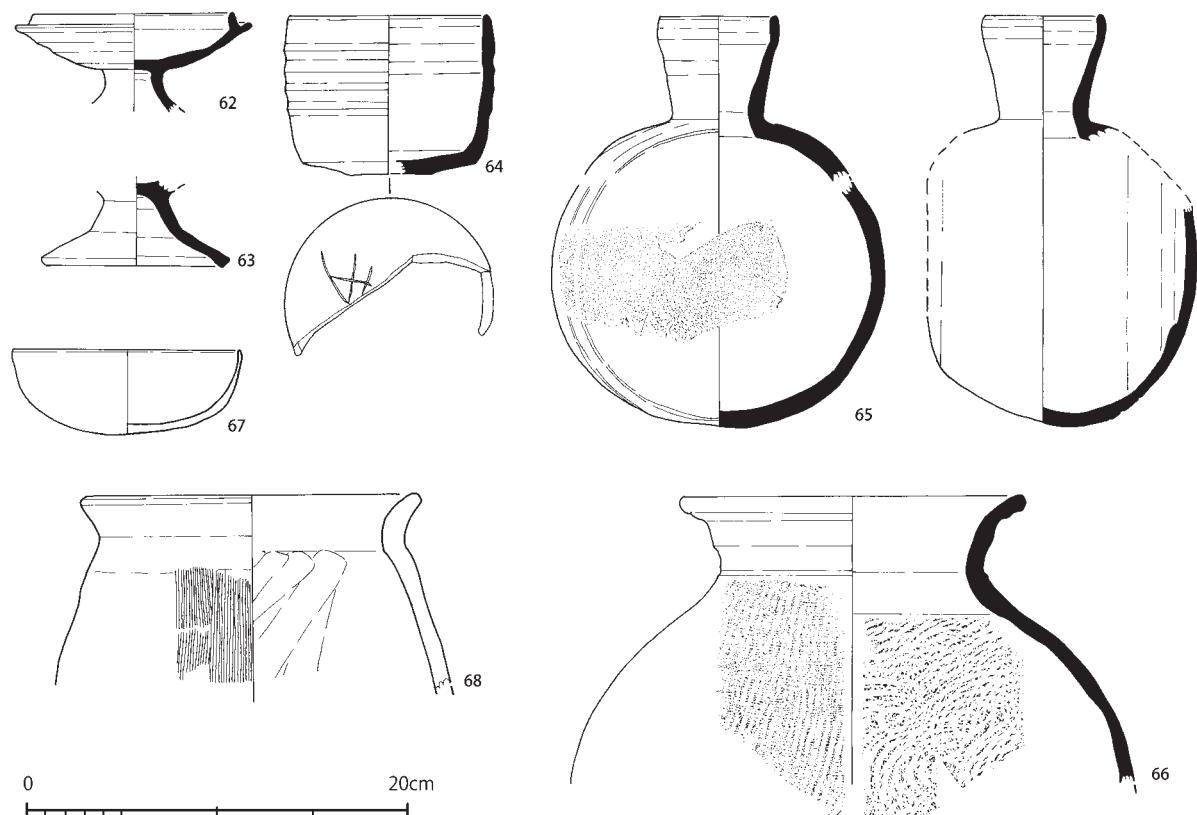


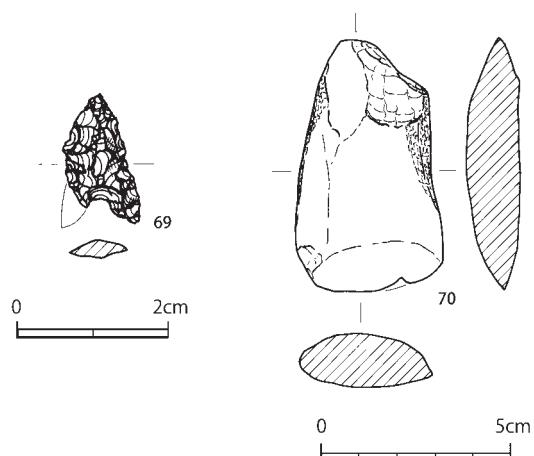
Fig. 17 1号溝出土遺物実測図3 (1/4)

遺構2条を検出したが、これが溝としての機能を有したか否かは明らかでない。

1号溝 SD-01 (Fig. 14~18 p.h. 9・10・12~14)

1号溝は、調査区の中央部を谷筋に沿って西流し、この溝を境にして南側には28・29号建物が占地している。溝は、小さく蛇行しながら谷筋に沿って西流している。占地的には、丘陵の北斜面に造成された整地面の北縁を西の沖積地へむかって流れ下っている。溝幅は、45~90cmで、上流の東端が広く、西端部は狭い。法面は緩やかに立ち上がり、北岸には60~90cm幅のフラット面を作っている。覆土は、粗砂粒を多く含んだ暗茶褐色砂土で、溝底には灰黒色砂土が薄く堆積していた。遺物は、多くの須恵器壺や鉢・高壺・甌・壺蓋のほかに土師器甕・高壺・瓶片と轆羽口片が出土した。

13~36は、須恵器壺蓋。13~15は天井部に摘みが付く。16~36は体部が丸く内彎し、天井部が弧状をなすものと平坦なものがある。37~61は須恵器壺。蓋受け部は体部からストレートに延びるものと水平に摘み出すものとがある。壺、壺蓋とともに天井部や外底面はヘラケズリで、「く」や「/」「イ」「×」「△」などのヘラ記号が刻み込まれている。62・63は、須恵器高壺。64は、口径が10.5cmの須恵器碗。体部には凹線状の凹凸があり、外底面には「△」のヘラ記号がある。65は、口径が6.5cmの須恵器提瓶。ドーム状の表面はカキメ調整で3条に凹線が巡る。66は、口径が18cmの須恵器甕。67は、口径が

Fig. 18 1号溝出土遺物実測図4
(1/1・1/2)

12cmの土師器壺。68は、口径が18cmの土師器甕。69は、黒曜石の打製石鏃で長さは1.7cm。70は、長さが6.6cmの玄武岩製磨製石斧。剥離整形後に敲打を加えて研ぎ出している。

23号溝 SD-23(Fig. 14 p h. 9・10)

23号溝は、調査区の中央部にあり、5m南には1号溝が並行して西流している。溝の西辺は、調査区東縁から約4m西流した地点で22号住居と重複し、その西は不整形土壙や搅乱壙によって削平されている。最大幅が55cm、最小幅は25cm。断面形は、溝底が浅い凹レンズ状の逆台形。溝底の標高は、東端が24.59m、西端が24.36m。須恵器壺・壺や土師器甕・高壺片がわずかに出土した。

6 その他の遺構と遺物

2号ピット SP-02 (Fig. 19 p h. 11)

2号ピットは、調査区中央部の東縁に位置し、柱痕跡のある柱穴と重複している。平面形は、直径が60cmの円形プランを呈し、急峻に立ち上がる壁面は深さが25cm。底面より10cmほど上から横位にした土師器甕が出土した。柱痕跡は検出されず、埋置されたものと考えられる。

71は、口径が15.9cm、器高が28.9cmの土師器甕。「く」字状の口縁部は短く外反し、胴部は卵形をなす。胴部外面が粗いハケ目、内面は押圧後に搔き上げ状の粗いヘラケズリ。

包含層出土遺物 (Fig. 20 p h. 15)

72・73は、須恵器壺蓋。74~77は、須恵器壺。蓋受け部の返りがストレートなもの(74・77)と

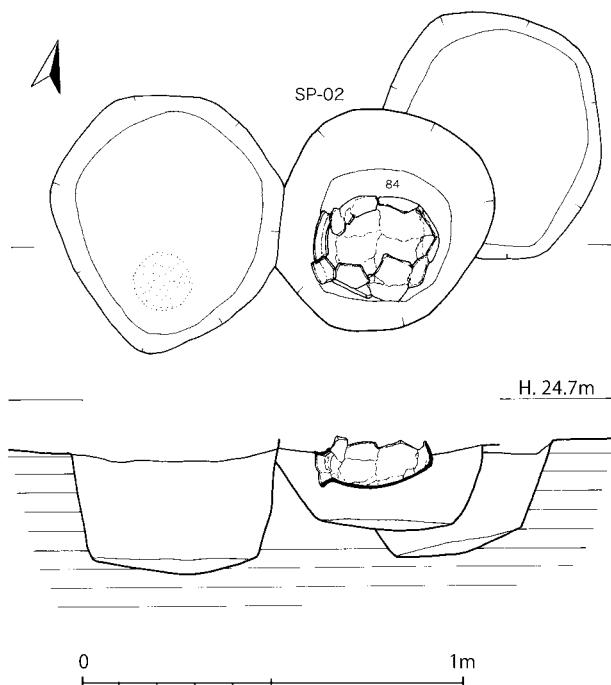


Fig. 19 2号ピット実測図 (1/20)



p h. 11 2号ピット遺物出土状況(北から)

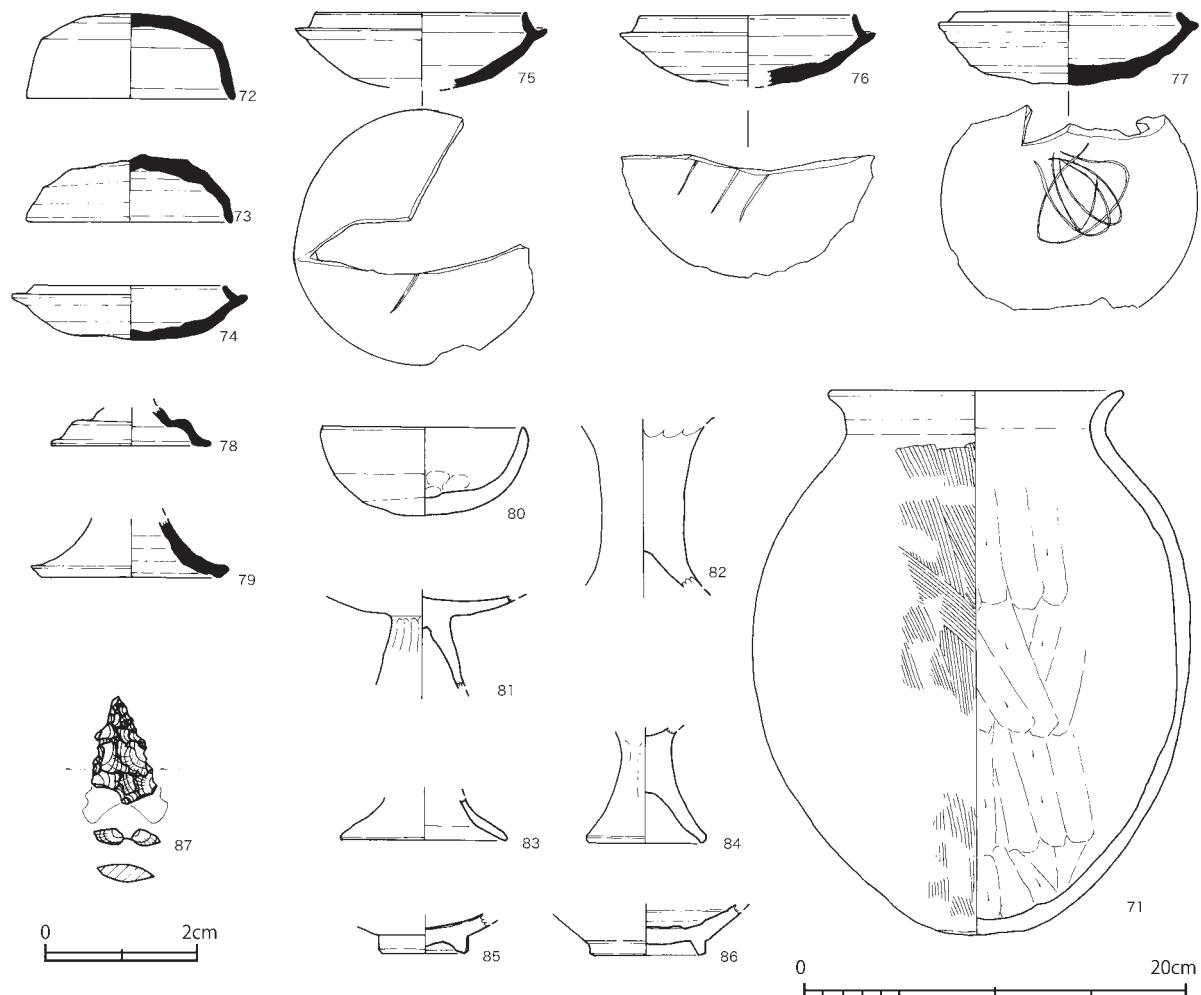
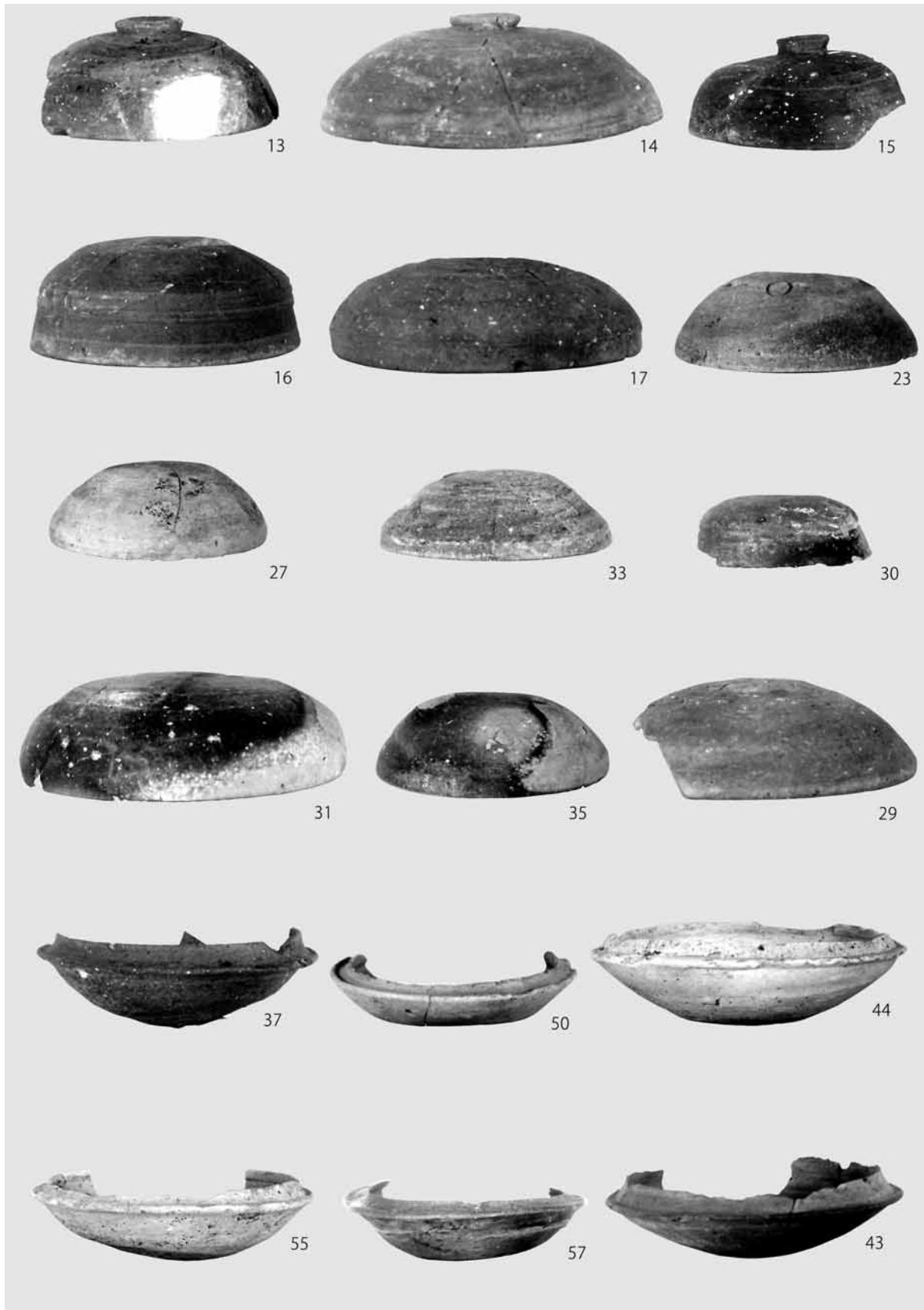


Fig. 20 2号ピット・包含層出土遺物実測図 (1/1・1/4)

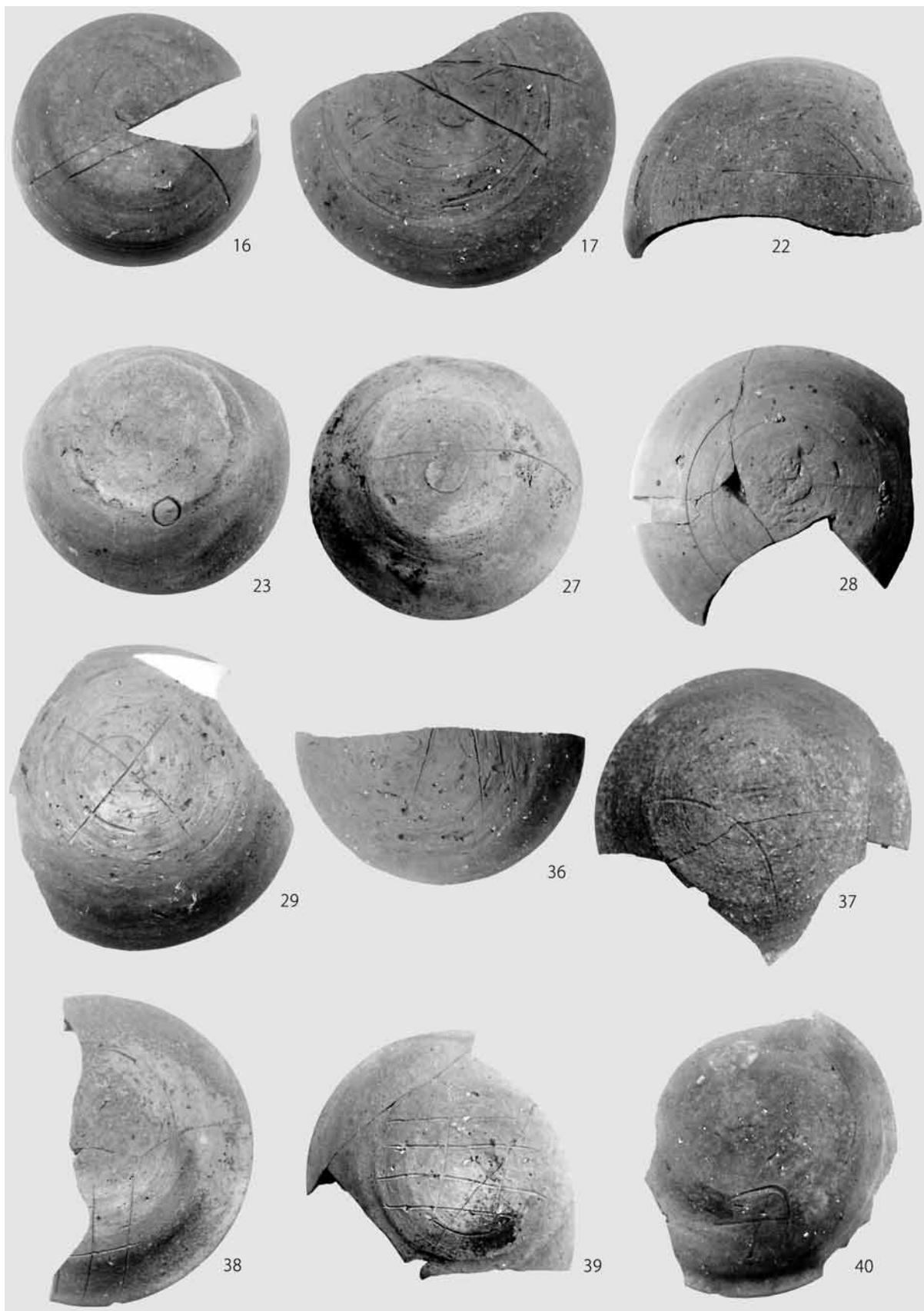
反りぎみに内傾するもの（75・76）がある。75・76・77には、外底面にヘラ記号がある。78・79は、須恵器高杯の脚。78は、外反する脚裾を二度水平に摘み出す二重口縁状をなす。80は、口径が10.8cmの土師器杯。81～84は、土師器高杯の脚。85・86は、白磁碗。87は、現長が1.95cm、重さが0.2gの黒曜石製有歯鎌で、断面形はレンズ状をなす。

III. おわりに

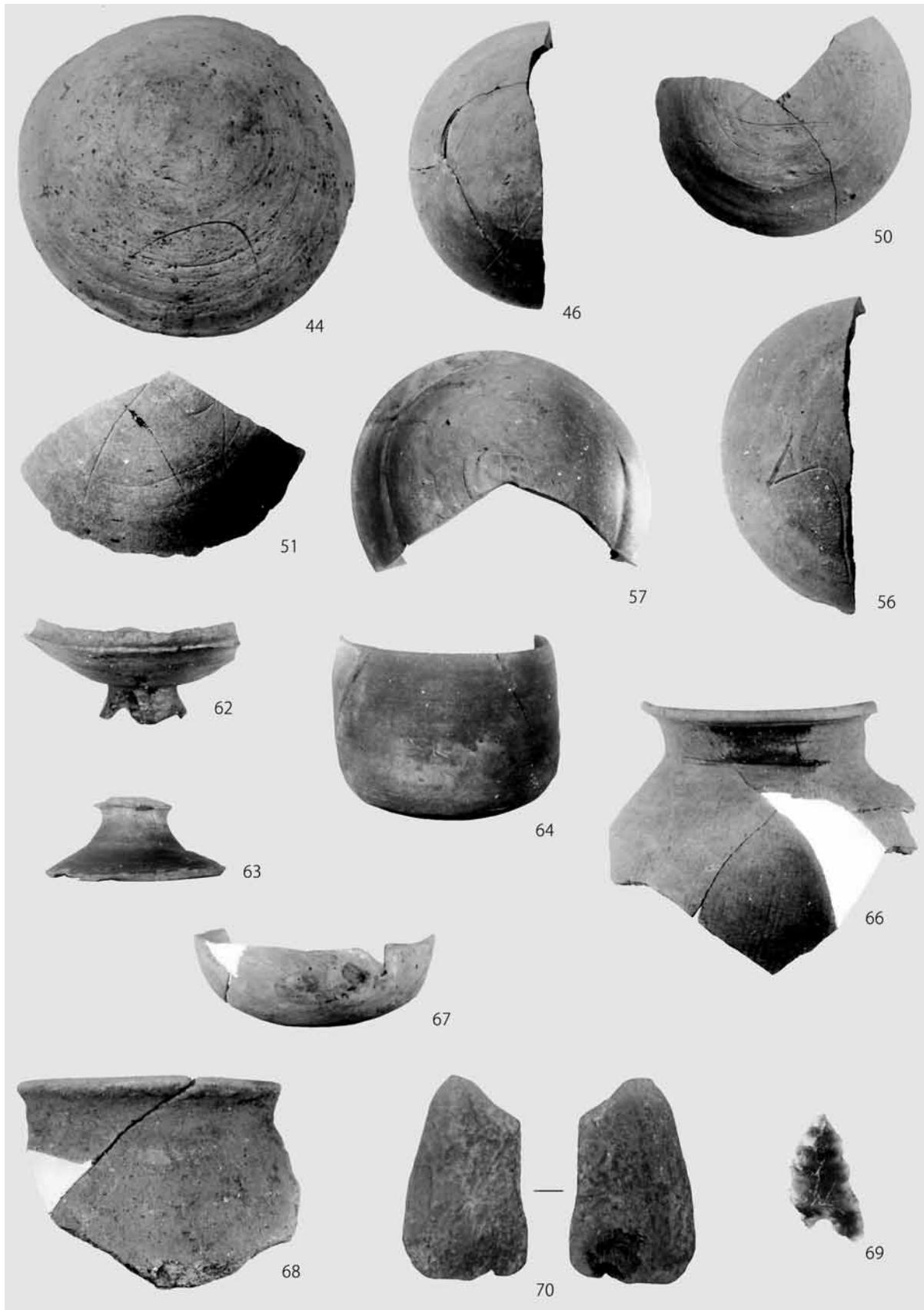
第8次調査では、堅穴住居跡2棟と掘立柱建物2棟、土壙3基、溝状遺構2条を検出した。特筆すべきは、狭い傾斜地と云う地形的な制約を受けながら10mほどの造成面を造り出して堅穴住居や掘立柱建物を構築している。殊に、2間×2間の総柱建物の北には建物と並行して溝が西流しており、造成段上に立地する倉庫域を開析谷から画している観が窺がえる。本調査区の西下に隣接する第4次調査区でも総柱建物が検出されており、同様の立地的要件を示している。両者間の比高差は1mあることを勘案すれば、舌状丘陵の北麓には雛段状に造成された狭小な整地面毎に倉庫域が構築されていたと考えられる。これは、南の舌状丘陵を隔てた開析谷に立地する第2次調査区でも2間×2間の総柱建物群と共に權や初期輸入陶磁器が出土している。「今昔著聞集」には筵田駅が詠まれており、官衙的施設あるいは駅家の施設の可能性が示唆される。1号溝出土の須恵器は、ⅢB～Ⅳ期の6世紀末～7世紀初めに比定される。また、出土須恵器のうち8や64は、金属製碗を模倣品の可能性が想起される。



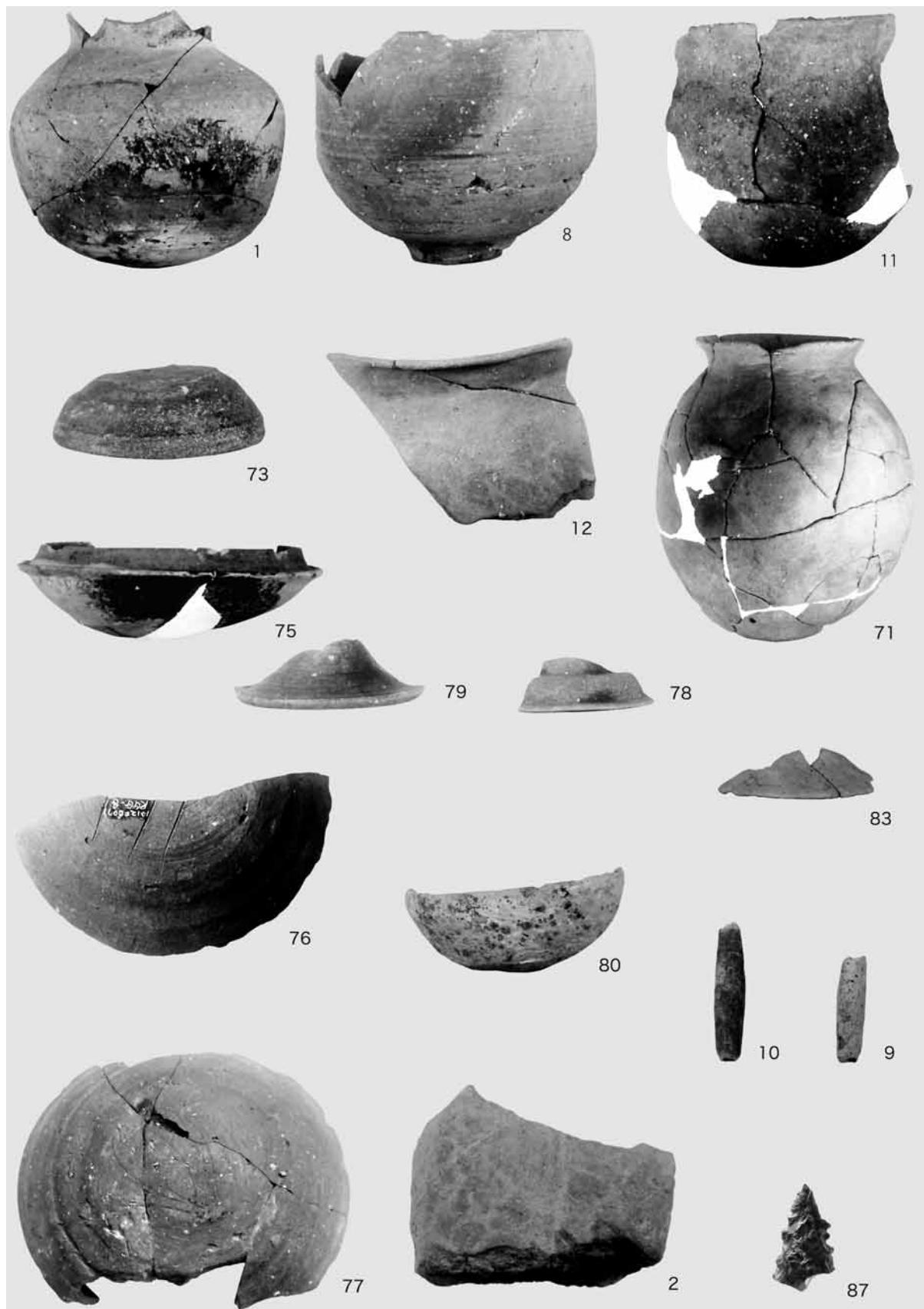
p h. 12 出土遺物 1 (縮尺不同)



p h. 13 出土遺物 2 (縮尺不同)



p h. 14 出土遺物 3 (縮尺不同)



p. h. 15 出土遺物 4 (縮尺不同)